

千葉県出土の円窓付土器について

－富津市打越遺跡の事例から－

菊池 健一

1. はじめに

筆者は2017年度から富津市打越遺跡の資料調査を実施して来た。今回、研究連絡誌に投稿の機会を得たので、「円窓付土器」を素材に小稿を草する事にした。

弥生時代中期から後期の尾張・三河地方には「円窓付土器」と呼ばれる、壺・甕の胴部を削り抜かれた土器が出土する。その例が、弥生時代中期から古墳時代前期に営まれた富津市打越遺跡等にも見られたのである。

今回は主に富津市打越遺跡の事例を分析し、地域を超えた交流が成立し得るのか、否か、また、円窓付土器の持つ意味について考えてみたい

2. 円窓付土器の研究史

なぜ本土器が注目されるのか、どの様に理解されて来たのかについて簡単に触れてみたい。

最初に円窓付土器を取り上げたのは、今から139年前の1886年で、熱田神社脇の道路建設に際し、破壊の危機にある高蔵貝塚の調査記録を行った鍵屋徳三郎氏であった。氏は報文中に遺跡の概要報告と共に採取した土器等の遺物について紹介したが、その中に円窓付土器2点の写真が掲載され、これが学史上の初見である（鍵屋徳三郎1886）。

1938年には、吉田富夫氏が円窓付土器の新例を紹介し、胴部上半に大きく穿孔するので、甕・注口土器の一種と用途はちがう、手焙形土器と相通じるような特殊な物を入れる容器ではないかと述べた（吉田富夫1938）。

それから少し時がたち1994年に伊藤淳史氏は、弥生時代中期の土器について伊勢湾側の視点から近畿地方との相互交流を論じた。文中、円窓土器についても触れている（伊藤淳史1994）。伊藤氏は、円窓付土器を近畿地方Ⅳ期に相当する伊勢湾中期4期に出現し、5期に盛行すると言った。また、円窓付土器を祭祀に用いられたものと仮定するならば、実用的な側面より祭祀という非実用的な意味でつかわれて、伝達されたと考えるべきである」と述べた（伊藤淳史1994：67～

68）。

伊藤氏は、円窓付土器は尾張で総数400点以上も発見され、その内、9割が朝日遺跡を中心とした尾張北西部からの出土で、移動や模倣の状況を把握することから製品の持つ意味に迫り、製作当初より、円窓付土器としての固有の器形を持ち、胴部上半に、焼成前穿孔により径10cm前後の円形の窓部を持つ、胴部には文様を施さないと述べた（伊藤淳史2002）。更に氏は3つの特徴を満たすものを「正統派円窓付土器」と呼び（伊藤淳史2002：pp.19-21）、胴部上半の同じ位置に円窓を有するという特徴的な部位を模倣するが、加飾し、脚台を付けたもの、焼成後に穿孔するものを「傍流円窓付土器」とした。そして、存続時期や分布がかけ離れて、無関係ととらえられるものを「似非円窓付土器」と分類した。更に「正統派円窓付土器」に関しては、凹線文出現以前からの伝統的な壺の製品と、そうでないものとの2種類に分けた（伊藤淳史2002）。

朝日遺跡の調査・整理を担当された永井氏は、九州、畿内、三河、関東地方での円窓付土器の広がりを紹介している。その中で関東の事例は「弥生後期には東海東部地域から南関東への影響が認められるが、正統派円窓付土器は認められない」と言う。また、伊藤淳史氏も「関東地方の事例の多くはおおむね和泉式～鬼高式期頃に比定され…これらが西方から伝播した土器や習俗に基づくものとみなすにはいささか時空間的に離れすぎている。弥生後期には東海東部地域から南関東への影響はかなり認められるが、そこに円窓付土器は含まれていない。現状では、関東地方、それも埼玉県や茨城県等を中心に独自に広まったものと見ておく」と言う。更に伊藤氏は、「土器に大きな穴をあけるという特殊性故に地域間交流の変化を探るための、指標と成り得るもので、特に、広範囲に影響が認められる凹線文期の社会変容や、地域圏が再構成される後期以降の変革という、重要な時期に関与している。他の土器群の動向とも比較することで、多様な次元の複合的な交流のあり様が見えてくる」と言った（伊藤淳史2002：p.25）。また、伊藤氏は、円窓付土器が拡散の

表1 円窓付土器出土遺跡

地方	県名	遺跡名	時 期	器 種		備 考
関東	千葉県	打越遺跡	後期中葉	壺2	甕	
	東京都	上小岩遺跡	古墳時代開始期	壺		バレス壺
近畿	滋賀県	下之郷遺跡	第Ⅳ様式中葉～後葉	壺		中期環濠集落・方形周溝墓大規模集落
		服部遺跡	第Ⅳ様式前葉	無文壺		埋没河道
		赤野井浜遺跡	第Ⅲ～Ⅳ様式	壺		溝内
		八夫遺跡	第Ⅳ様式後葉	壺		下之郷遺跡南方約2.5km、下之郷遺跡解体後
		伊勢遺跡	後期中葉～後期	無頸壺？		山城の前期から後期の拠点集落・住居
		雲宮遺跡	第Ⅳ様式後葉	壺		
	京都府	長刀鉾町遺跡	第Ⅳ様式前葉	壺		
		木津川河床遺跡	後期終末	横線壺		壺横線文
		時塚遺跡	庄内式以前	脚台付壺		SD526（環濠？）
		池上遺跡	後期	脚台付壺		
	大阪府	平野遺跡	第Ⅳ様式後半		台付壺	近畿地方唯一の正統派円窓付土器
		宣振遺跡	古墳時代前期	壺		
	兵庫県	八代深田遺跡	第Ⅳ様式前葉～中葉	壺		
	奈良県	芝遺跡	第Ⅲ・Ⅳ様式（中期）	脚台付壺		
		唐古・鍵遺跡	後期	脚台付		北方砂層
東海	静岡県	横枕Ⅰ遺跡	中期中葉・後期	焼成後穿孔		壺棺
	愛知県	朝日遺跡	中期中葉・後期	壺	甕	350点
		阿弥陀寺遺跡	後期中葉	平底5	脚台付	集落跡
		岡島遺跡	中期中葉	壺	甕	竪穴住居跡
		川原遺跡	中期中葉	壺		方形周溝墓
		鹿乗川流域遺跡	中期中葉・後期	壺	甕	竪穴住居跡
		下橋下遺跡	後期後葉	壺		旧河道
		釈迦山遺跡	後期後葉	壺		竪穴住居跡
		高橋遺跡	後期後葉	壺		環濠
		東光寺遺跡	後期中葉	壺		環濠
		東郷遺跡	後期後葉	壺	甕	環濠・土墳
		郷中遺跡	後期中葉	壺		環濠
		赤日子遺跡	後期後葉	壺	甕	環濠
		高井遺跡	後期中葉・後葉	壺	甕	
	岐阜県	荒尾南遺跡	後期前半	壺		環濠
北陸	石川県	八日市地方遺跡	中期後葉	甕		あいち朝日遺跡ミュージアム（2002企画展）
九州	福岡県	南雲番上遺跡	後期前半～中葉・古墳前期	台付甕		
		南雲八反田遺跡	中期後半	平底甕		須玖Ⅱ
		小葎遺跡	中期後半～後期初頭	台付甕		竪穴住居
		今宿五郎江遺跡1～4次	中期後半終末	台付甕		環濠
		今宿五郎江遺跡Ⅲ	中期中葉～後期前半	脚付壺		包含層
		今山遺跡42地点	古墳時代前期？	丸底甕		製塩跡
		有田遺跡3次調査	後期初頭	台付甕	平底甕	井戸
		上毛町郷ヶ原遺跡	後期後半	無頸壺		山中式土器
		吉武遺跡群3次	後期中葉	台付甕		
		那珂遺跡20次	中期後半	台付甕		
		那珂遺跡106次	中期後半	平底甕		井戸
	佐賀県	松原遺跡	後期前半	平底甕		
韓国	慶尚南道	固城東外洞遺跡	後期・古墳時代前期	台付甕	無頸壺	甕（後期）壺（古墳前期）

註：木津川河床遺跡出土の資料の出土位置は9月16日に京都文化博物館学芸課山崎頼人氏からご教示頂いた。

註：唐子遺跡の第Ⅲ様式SE46下層は南関東中里式壺、No.520：縄文地文沈線（横線+円文内列点）は須和田式の土器と考えられる。

註：三河編年と一般編年の対比については鈴木とよ江氏に直接お伺いいたしました。

註：固城東外洞遺跡の円窓付土器については、武末純一氏より、資料提供を受けた。

背景には、面的に広がる文化現象ではなく、拠点集落間どうしの点的な交渉の存在が予想され、その中心は野洲川下流域にあるとした（伊藤淳史2002）。

一方、円窓付土器の広がりについては、永井氏が精力的に取り組まれた（永井宏幸2013、2014）。その拡散状況から見える地域間交流は、一方通行ではないと考えた。また、土器の実用性を否定した容器が何故広範囲に分布するのかについての疑問に対して、朝日遺跡の整理作業に取り組まれた高橋信明氏によると円窓付土器の特徴は容器としての実用性を完全に否定し、穿孔行為は焼成前で、転用の不可能な完結した形で存在すると言う（高橋信明1995）。

愛知県では朝日遺跡の他、拠点集落と考えられる瑞穂遺跡や高蔵遺跡でも出土した例があり、主な目的として壺棺の主要部分（骨を納める）であると言われている。以上のごとく円窓付土器研究では、何に使われたのかと言う機能についての議論はあまり発展しなかったが、西日本での発見例は多数に及び、型式研究は進んでいる（表1参照）

3. 円窓付土器の調査経緯

千葉県打越遺跡から出土した円窓付土器は広口壺2点、甕1点の計3点がある。その内、広口壺2点を2023年より実見調査してきた。本年度に入り、本誌への投稿の機会を得たので、更に類例調査、文献調査を実施し、本稿の提出に至った。ここで、打越遺跡の円窓付土器の分析に入る前に、分析研究が進んでいる愛知県朝日遺跡の研究を紹介したい。

筆者は、円窓付土器の起源を理解する為に調査申請を2024年6月7日に愛知朝日遺跡ミュージアムに提出し、6月16日付で許可を得て、7月27日から28日に実際に現地で原田幹氏・松本彩氏・永井宏幸氏にお世話になり、資料調査・聞き取り調査を実施した。博物館調査では、朝日遺跡で3点の円窓付土器を実測・写真撮影することが出来た。その折には、原田氏のお陰で、愛知県埋蔵文化財センターの永井宏幸氏を紹介して頂き、永井氏と直接お会いし、ご教示頂くことが出来たので、その内容を論稿中に紹介したい（註1）。

4. 朝日遺跡出土円窓付土器の紹介（第1図）

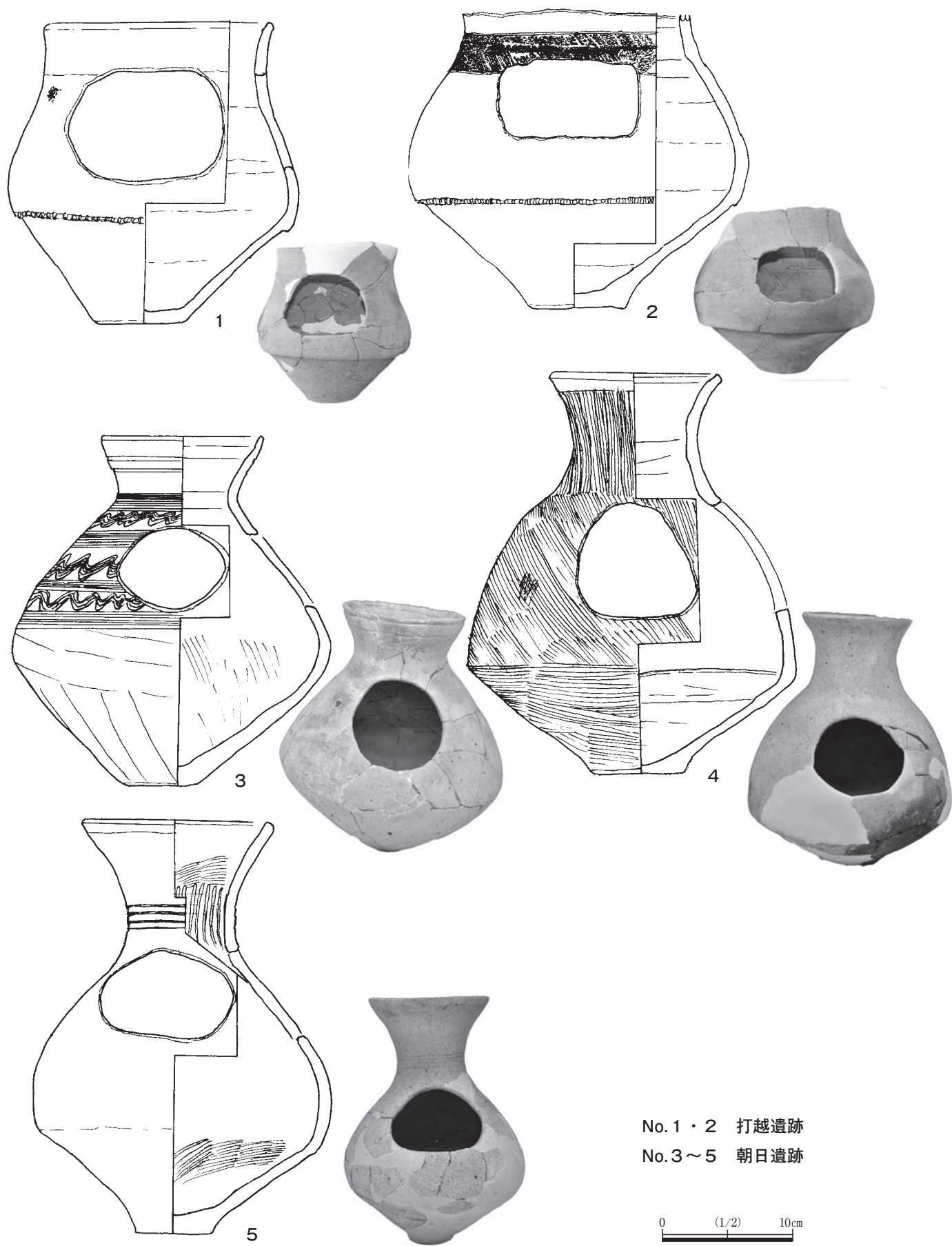
先にも述べたように2024年7月27日から28日に、愛知朝日遺跡ミュージアムの原田氏、松本氏にお世話になり、また、永井氏に助言を頂いて資料調査を実施する事が出来た3点の土器についての知見を紹介す

る。今回、調査を実施したのは、No3（図版1-No3、列品番号684、以下図版番号省略）・No4（列品番号1141）・No5（列品番号1433）の3点である。

No3は、報告書（石黒立人他1982）によるとⅣ区4B3-4地点からの出土で、高蔵式～山中式に帰属する朝日遺跡分類F4とされる。器高25.7cm、口縁部径12.4cm、胴部最大幅24.6cm、底部径5.5cm、口縁部の一部を欠損する壺で、全体調整は胴部下半に6/cmで時計回りに粗いハケ整形が施されている。他はナデ調整である。頸部から胴部中位にかけては6/cmで時計回りに施された櫛描き波状文と櫛描き横線文の組合せが3段認められる。胴部外面には赤彩が施されている。胴部上半には縦6.5cm、横8.5cmの長楕円形に近い円窓が穿孔されている。穿孔は焼成前であり、施文が施された後の段階で、焼成直前に刀子状工具により、6回以上の刺突によって切り取られている（寺島孝一1979）。破断面を指ナデ調整していると観察出来る。胎土は川砂起源と推定される2mm大の砂粒を多く含み、同時に観察させて頂いたパレス壺とは異なる胎土である。永井氏が言われるように、長期間に渡る放置状態が想定される。また、永井氏によると、円窓付土器で装飾を持つ例は少ないとのことであった。

No4は、報告書（石黒立人他2009：p215、図版4.5-2）に掲載されている。器高30.8cm、口縁部径13cm、胴部最大幅25.2cm、底部径8.8cm、口縁部の一部を欠損する壺で、全体調整は胴部上半に8/cmで時計回りの粗いハケ整形が、胴部と口縁部の2段階に施されている。下半はナデ調整による。調整方法を尾張以東の土器と比較すると、菊川式土器の調整に類似する。装飾性は認められない。胴部上半に縦9cm、横9.5cmの長楕円形に近い円窓が穿孔されている。穿孔は焼成前であり、施文が施された後の焼成直前の段階に刀子状工具で、13回以上に渡り、突き刺して切り取られている（寺島孝一1979）。破断面を指ナデ調整しているものと観察出来る。胎土には、川砂起源と推定される2mm大の砂粒を多く含む。胴部には黒斑が認められ、土器の焼成は野焼きによると考えられる。また、煤が付着し、焦げた跡であろう。胴部下半は風化が激しく、調整痕跡はほぼ見えない。永井氏によると、出土状態は集落から出土や、方形周溝墓につながる墓道から出土した例もあり、風化する場所に据え置かれたせいではないかと教示があった（註2）。

No5は、報告書（永井宏幸他1982：p215、図版4.5-2）（図版75）によるとⅢ1F17-18黒色土層下部か



第1図 円窓付土器（朝日遺跡・打越遺跡）

ら出土した。帰属時期は高蔵式～山中式に帰属する朝日遺跡Ⅳ期分類F2である。この土器は器高32cm、口縁部径15cm、胴部最大幅23cm、底部径6cm、口縁部の一部を欠損する壺で、胴部外面の全体調整はナデ調整(?)後、ミガキが施されている。内面は木口状工具(ハケ整形)8/cmで、時計回りの粗いハケ整形が口縁部上半と底部付近に認められる。頸部に櫛状工具による4条の横線文が認められる。胴部上半に縦6.5cm、横10cmの長楕円形に近い円窓が穿孔されている。穿孔は焼成前、施文が施された後の焼成直前の段階に刀子状工具で、9回に渡り、突き刺して切り離し、刺突によって切り取られている(寺島孝一1979)。破断面を指ナデ調整しているものと観察出来る。胎土には赤色スコリアが目立ち、金雲母(?)と川砂起源と推定される2mm大の砂粒を含む。胴部下半は風化が激しく、白色化している。調整痕跡はほぼ見えない。前記した2例と共通している。

以上、資料調査の成果について述べて来たが、朝日遺跡の円窓付土器は畿内第Ⅲ様式に併行する貝田町式の時期に出現し、朝日遺跡遺跡で集落の衰退が認められる弥生後期山中式まで継続するようである。

5.1 打越遺跡の概要

ここでは千葉県富津市打越遺跡の円窓付土器を紹介したい。打越遺跡は、千葉県西上総の小糸川河口域を北に望む、標高約15mの神明山麓の微高地上に立地する。遺跡が立地する神明山の標高は66.4mで、低山ではあるが、富津岬から山際まで平坦であることから、遠方からも際立って映る。晴天の日には、東京湾対岸の久里浜からも房総丘陵の一端として、十分に目視出来る。古代から海上航行の目標物として重要な役割を担っていたのであろう。更に本遺跡北側は、小糸川の旧流路に面しており、周囲は河口域と中流域から下流域を結ぶ水上交通の要衝であったと考えられる。

本遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期の集落遺跡として知られており、開発に先立ち、これまで数次に渡り調査がなされてきた。今回、報告紹介する資料は、(財)君津郡市文化財センターが1987年から1988年にかけて、富津市役所庁舎建設に先立つ調査の際に調査された資料の一部である(酒巻1992、2003)。

5.2 打越遺跡出土土器の分析(第1図)

打越遺跡から発見された円窓付土器は、広口壺2点、甕1点の計3点があり、その内、実見した2点の広口

壺の分析を行う。なお、執筆前に実見した土器は再実測を行った事を報告しておく。

まず、報告書に掲載された図版1-No.1(注記番号10T-025-0084)と図版1-No.2(10T-01-0018)は前述したように観察・実測し、その際に気が付いた事を含めて記述したい。

No.1は報告書(酒巻1992:p372)によると弥生時代後期に多量廃棄されたグリッド出土遺物の一つである。報告書によると土器が多量に廃棄された状況について、遺構との関連性を明瞭には捉えられないが、環濠・方形周溝墓から出土した可能性もあると説明されている。器高23cm、胴部最大幅22.7cm、底部径6.5cm、口縁部・胴部の一部を欠損する広口壺で、後述するNo.2(10T-01-0018)と良く似た特徴を持つ。全体調整はナデによる。胴部の所々に粘土帯の接合痕跡が認められる。文様は風化によりほとんど目視出来ないが、頸部に沈線区画の交互斜縄文を施し、胴部下半部と底部の間には段があり、竹管状工具による刺突が加えられる。胴部上半に縦9.7cm、横12.4cmの長方形に近い円窓が穿孔される。一部、欠損している為に観察出来ない部分もあるが、穿孔は焼成後に行われていると判断できる。この点は後述する第34号住居跡出土の広口壺の円窓穿孔が焼成前であるのとは異なっている。胎土には金雲母が多量に観察出来る。色調は10YR 6/4のにぶい黄橙色で、器面は風化による変色が認められ、これは他の土器と比較してみなければならないが、No.1と同様に長期間に渡る放置状態にあったので風化したものと理解される。また、胴部内面には煤が付着しており、本資料の用途を考える上で重要である。拓本によって図化したが、本資料の文様帯は不明瞭である。

No.2(注記番号10T-025-0084)(報告書:酒巻1992:30,59)は34号住居跡から出土している。本住居跡は調査区南側に位置し、33号住居跡を切って構築されている。住居跡からは本資料を含めて60点の土器が折り重なる状態で出土したが、全て同時期に廃棄されたものと理解される。本円窓付広口壺は堅穴住居跡西壁側の柱間から出土した。口縁部・胴部の一部を欠損する広口壺で、頸部には沈線区画の交互斜縄文を施し、器高22.5cm、胴部最大幅26.5cm、底部径7cm、全体調整はナデにより、胴部下半には竹管状工具による刺突が加えられている。胴部上半に縦6cm、横11cmの長方形に近い円窓が穿孔されている。一部、欠損している為に観察出来ない部分もあるが、穿孔は焼成後に

行われたもので寺島孝一氏は円窓に残る屈曲線を刀子によって切り離した痕跡と考えている（寺島孝一1979）。コンパス等の道具が無い時代で円形に穿孔する事が難しかったはずなので、筆者も寺島氏の考えに同意する。本例は刀子による複数回に渡る穿孔後、破断面を指ナデ調整している。胎土には赤色スコリアが僅かに見られる。色調は10YR7/3のにぶい黄橙色で、器面は風化による変色が認められ、長期間の風雨にさらされた結果と理解される。拓本によって図化したのが、胴部上半の文様帯は明瞭に観察出来る。

この他に今回は借用出来なかったが、弥生時代後期に多量廃棄された70号住居跡からは、器高41.1cm、口縁部径31cm、底径9.3cmの大型甕の胴部中央に、焼成後に穿孔されたと考えられる円窓付土器も発見されている（酒巻1992）。以上、打越遺跡の円窓付土器とされる3点の土器に、穿孔が焼成前のものと焼成後のものがある事が解った。また、編年上の位置づけは次に説明するが、No. 1とNo. 2の個体を比較すると、No.1の方が先行するように思える。つまり個体間の比較では焼成前の穿孔が先となるようだ。

5.3 打越遺跡の円窓付土器の帰属時期

西上総地域における弥生時代から古墳時代前期の土器編年は、今から28年前に（財）君津郡市文化財センターの共同研究が先駆けとなる（土器研究B班1996）。その後、市原市国分寺台遺跡群を整理した大村直氏の土器編年（大村直2004）をはじめとして、多くの研究が進められてきた。

中でも、最近、小沢・加藤両氏により西上総の当該期の編年研究が的を射たものとして注目される（加藤修司・小沢洋2024）。本稿では両氏の研究を援用して、円窓付土器についての帰属時期を考察してみたい。まず、広口壺の出現は弥生時代中期の宮ノ台式後半に求められ、終焉は古墳時代前期後葉まで継続すると言われている。この編年観の中では、本稿で取り上げた頸部に沈線区画の交互斜縄文を施し、胴部下半部と底部の間には段を持つ広口壺は、弥生時代後期中葉（小沢・加藤編年弥生後期3期）の標識資料として位置づけられる東谷遺跡461号住居から出土している。弥生時代後期後葉（小沢・加藤編年弥生後期4期）の標識資料として位置づけられる野焼遺跡A200住居、マミヤク遺跡30号住居出土の広口壺にも装飾性は見られるものの、頸部装飾の区画がS字状結節となるなど本例と比較すると違いが認められる。このことからすると

円窓付土器の出現は尾張編年によると、朝日遺跡で典型的な円窓付土器の終焉は見晴台式（後期初頭）から山中式（後期前葉から後葉）の間、山中式以降、尾張周縁から三河にかけて台付甕の円窓付土器へと変貌すると永井氏から教示を受けた。また、永井氏は「最後の円窓付土器」と位置付けた朝日遺跡SX194出土の脚付壺と台付甕は大きな変革期とする（永井2013）。時期は見晴台式あるいは山中式古段階、東海西部から土器が東方展開する始まりに相当するとされる。つまり、土器に現れた交流が顕在化するのとは廻間Ⅱ式以降だが、その始まりは山中式の段階にも認められる。

6. まとめと将来の課題

以上、打越遺跡から出土した円窓付土器について、形態的な特徴について述べ、帰属時期を検討した。また、打越遺跡の円窓付土器が果たして、オリジンとなる愛知県朝日遺跡の円窓付土器と、同質であるのか否かを考えてみる必要があった。そこで永井氏の研究成果を基に表1を作成した。この表により円窓付土器が各地への拡散していく様子を掴む事が出来る。

円窓付土器が出土した遺跡の広がり、朝日遺跡を中心とした尾張に始まり、三河・遠江へ、また、近江・京都・大阪・兵庫・奈良等畿内の中心となる遺跡で発見されており、九州圏では福岡・佐賀県を中心とした広がりが認められ、国外では韓国慶尚南道固城郡固城邑固城東外洞遺跡（武末純一2023）で弥生時代後期に北部九州の系譜をひく脚台付き円窓付土器が確認されている。今回、紹介した打越遺跡の円窓付土器は尾張の朝日遺跡周辺から西方への拡散と同様の系列にあると理解される。

最後に弥生時代から古墳時代前期に関わる円窓土器の打越遺跡以外の事例として上小岩遺跡での出土例を挙げる。上小岩遺跡は江戸川区に所在する遺跡で東海西部系のS字甕が多量に検出された事で知られている（熊野正也1988、1990）。この資料の中に東海西部系のパレス壺に似た白色胎土で、外面が赤彩され、底部に木葉痕を残す壺があり、胴部に大きな円孔が穿たれる土器がある。穿孔は焼成後と思われるが、円窓付土器の例に含まれる可能性がある。こういった事例を加えると、伊藤氏が指摘された関東圏から出土した胴部外面に大きな穴を穿つ土器が「西方から伝播した土器や習俗に基づくものとみなすにはいささか時間的に離れすぎている。弥生後期には東海東部地域から南関東への影響はかなり認められるが、そこに円窓付土器は

含まれていない。」という説を見直す必要があると思われる。この視点について永井氏に相談すると氏は筆者の意見に首肯し、『近畿と北部九州の事例も、管見によれば搬入品はなく、「在地化した円窓付土器」で、いずれどこかで東海西部（朝日遺跡）の搬入品が出土する可能性があるが、打越遺跡の類例が「最後の円窓付土器」以降に併行する土器に時期比定されるのであれば、納得できる』との意見を賜った。

また、千葉県では西方から伝播した土器や習俗が、やや時系列を超えて継承された例がある。茂原市国府関遺跡では波状文と横線文が組み合わせられ、赤彩された壺がある（菊池健一2023）。この壺の文様間に円形に赤く彩る列点が等間隔に施されている。筆者はこの施文方法の系統をひく土器は、遠く尾張の弥生時代後期前葉の山中式に認められると考えるが、この件も永井氏に問い合わせると「口縁部の形状が東海西部ではなく在地のもの、棒状浮文はそれぞれの幅が広い、円形の赤彩文はモチーフとしてはパレススタイル土器にあるが、朝日遺跡以外は少ない傾向にある」との指摘を受けた。更に氏は「東海西部からの搬入品ではなく、在地の模倣品の可能性が高い」とされ、「朝日遺跡では終焉を迎える円窓付土器の時期に東方で模倣される土器群として位置付けることも可能では」との意見を賜った。茂原市国府関遺跡の開村は古墳時代開始期と考えられ、筆者は「一型式前の壺の装飾の特徴が継承されて残った伝統」と考えている（田中琢1983）。関東地方で、山中式の段階での影響は神奈川県東部の環濠集落として知られる、神崎遺跡に類例が見られる、神崎遺跡から検出された土器は、主に愛知県東部の豊川流域にあたる地域で見られる山中様式三河型と呼ばれる土器が最も多く、続いて天竜川より西側の山中様式西遠江型の土器が多く見られる（岡本勇1992、村上吉正1996）。今回、紹介した円窓付土器は畿内庄内式、東海西部廻間Ⅱ式の大交流時代、古墳時代開始期以前の地域間交流の一つと位置付ける事が出来る。

謝辞 文献調査・資料調査及び原稿執筆の際には以下の方々にお世話になりました、記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。ご協力・ご助言いただいた同僚の方々に感謝申し上げます。

あいち朝日遺跡ミュージアム、石川日出志、飯島直子、植木武、小沢洋、加藤修司、金木祐天、熊野正也、小林信一、菅崎幸一、鈴木敏則、鈴木とよ江、武末純一、佃紗奈、常松成人、永井宏幸、中島郁夫、中林菖、蜂

屋孝之、日高慎、原田幹、深谷市教育委員会、富津市教育委員会、松本彩、吉田赴、八千代郷土博物館、渡辺修一

註

註1 土器は用途により、供膳、供献、煮沸、貯蔵にわけられる（斎藤忠1992）。円窓付土器は、器形的に球形の胴部に細頸の口部を取り付けた壺の形であるが、胴部上半に片手が入る程の大きな穴を開けており、器形としては壺に似るが貯蔵具としての壺ではない。

円窓付土器の機能を考える前提として、土器に穴を開ける行為は、土器の成形段階に行われたものなのか、成形終了後に行われたのかを考えたい。

本稿で取り上げた。打越遺跡の円窓付土器の穿孔が焼成前であるか、焼成後であるかについては、今年度、千葉県の千葉大学で日本考古学協会が開かれた折、鈴木敏則氏にも、実見して頂き、穿孔は焼成前と、穿孔後に穿孔されたものがある事を確認していただいた。また、中島郁夫氏には、本年9月8日に明治大学でシンポジウムが開かれた際に焼成後の土器に穴を開ける事が出来るのかと質問した所、「コツコツと割れば可能」と教えて頂いた。それでも筆者には疑問が解けず、土器へ穴をあける穿孔実験を行ったので、その経緯を報告する、焼成前の穿孔は現在、参加している八千代市郷土博物館の土器づくり同好会で実際に土器を造り、穿孔を試みた。実施に際しては同館吉田赴氏に協力頂いたのだが、その結果、土器の穿孔は土器の成形から焼成に至る製作工程の最終段階である、半乾燥段階に、竹篋や、刀子状工具で行われた事が解った。また、土器の焼成後の穿孔は本年10月5日に開催された埴輪研究会の折、深谷市教育委員会の中林菖氏から、深谷市の土器作り講座の際に作成し、古くなったので廃棄すると言う模倣土器を頂いて穿孔実験を行ったが、土器の輪積み痕から割れてしまい、円窓を開ける事ができなかった。この点は複数回の検証が必要だがこの結果から考えると、土器に穴を開けるという行為は当初より、土器製作工程の中に組み込まれて意図していないと出来ないものと考えられる。

註2 愛知県埋蔵文化財センターの永井氏に、打越遺跡出土資料の写真を送り、名づけ親は誰なのかを聞き、更に土器の持つ意味をどの様に理解すべきかと尋ねた所、以下の回答を得た。まず、朝日遺跡の円窓付土器は弥生後期初頭に消滅する。代わって周辺遺跡に円窓付土器が散見し、円窓付土器には壺形や甕形があるけれども、壺形土器は後期のうちになくなると言う。名づけ親は誰なのかと言う疑問に対して、永井氏は「実は、はっきりとはわからないが、最初の発見は、名古屋市長蔵貝塚の調査を最初に手がけた鍵谷徳三郎による報告であった（鍵谷徳三郎1908）」。「鍵谷氏は報告の中で「側面に円窓ある土器」と呼び、柴田常恵は『世界美術全集』第四巻1930（昭和5）年の中で、初めて「円窓付壺形土器」として紹介した（柴田常恵1930）。また、具体的な事例をあげて紹介した初出としては、1937（昭和12）年吉田富夫「所謂圓窓附土器及び其の新例に就いて」『考古学』第9巻第8号401—403頁である（吉田富夫1937）。古くから出土例があり、考古学辞典も項目がある反面、「用途不明」とされてきた経緯がある。

筆者が問い合わせた2点目。円窓付土器の持つ意味を、どの様に理解すべきかについて永井氏は『「焼成前に穿孔がある」との理解から、「焼成後穿孔」と比較されることが多く。形と

しては類似するが、焼成前穿孔でなければ円窓付土器とは呼ばない』と言う。弥生時代中期から後期にかけて、愛知県内には焼成後穿孔の壺形土器はある（鈴木とよ江 2007）。これらは土器棺墓に用いられることが多く、埋設時に穴を土器片で覆う事例もある。大きく円形に穿つ焼成後穿孔の土器棺を円窓付土器の影響と考える説もあるが、円窓付土器は永井氏の管見では土器棺に使用された事例はない。円窓付土器は、窓部が焼成前穿孔であることを第一義とする立場から、焼成後穿孔の土器とは異なるものと捉える。朝日遺跡の完形品について出土分布を見た場合、居住地にはなく、居住地と墓域の間、あるいは墓域に多く出土することから、墓地での使用に関わる道具の一つであると仮説を提示した。（永井宏幸2009）二つ目については、仮説の域を出ず、また、使用痕跡から特定の用途を指摘できない」と永井氏は言う。

参考文献

- 伊藤淳史1994「弥生時代における地方間交流－伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動－」『史林』第77巻第4号 史学研究会 京都大学文学部
- 伊藤淳史2002「円窓付土器からみた弥生時代の交流」『川から海へ1－人が動く・モノが運ばれる－』一宮市博物館
- 石黒立人他1982『朝日遺跡Ⅳ（土器図版編）』愛知県教育委員会
- 石黒立人1990『阿弥陀寺遺跡』（財愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 財愛知県埋蔵文化財センター）
- 石黒立人2009『朝日遺跡Ⅷ（総括編）』愛知県教育委員会
- 石黒立人2020「荒尾南遺跡出土土器と地域関係」『荒尾南遺跡を読み解く』第34回考古学研究会東海例会
- 井沢洋一1987『有田・小田部第8集』福岡市教育委員会
- 大村直2004『山田橋大山台遺跡』市原市文化財センター88集
- 大橋信弥・山崎秀二1987『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』守山市教育委員会
- 岡本勇1992『綾瀬市埋蔵文化財調査報告書－神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市教育委員会
- 折尾学1981『今山・今宿遺跡』福岡市教育委員会
- 鍵谷徳三郎1908（明治41）年「尾張熱田高倉貝塚實査」『東京人類学雑誌』第23巻 第266号、pp.275-283
- 加藤修司・小沢洋2024「西上総における弥生時代～古墳時代前期の土器編年」『木更津市史研究第7号』
- 小林行雄1956京都帝国大学文学部『考古学研究報告第16冊 大和唐古弥生式遺跡の研究』
- 小林義彦1986『福岡市今宿五郎江遺跡Ⅰ』福岡市教育委員会
- 菊池健一2023「特別寄稿国府関遺跡の外来系土器」『茂原市史資料編Ⅰ（原始・古代、中世）』
- 熊野正也1988『上小岩遺跡Ⅰ』
- 熊野正也1990『上小岩遺跡Ⅱ』
- 小林行雄1956『考古学研究報告第16冊 大和唐古弥生式遺跡の研究』京都大学文学部
- 本報告書では第Ⅲ様式SE46下層から南関東中里式壺、No520では縄文地文とする甕に横線と円文内に列点を加える須和田式に類似した土器が掲載されている。
- 小林義彦1986『福岡市今宿五郎江遺跡Ⅰ』福岡市教育委員会
- 斎藤忠1992『日本考古学用語辞典』学生社
- 佐々木好直2005「Ⅲ遺物」『芝遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第91冊
- 柴田常恵1930「136脚付壺形土器・圓窓付壺形土器・彩色文土器」『世界美術全集』第4巻p.80

- 酒巻忠史1992『打越遺跡・神明山遺跡』（財君津郡市文化財センター）
- 佐々木好直2005「Ⅲ遺物」『芝遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第91冊
- 塩谷勝利・力武卓治1997『那珂43－那珂遺跡群第106次調査報告』福岡市教育委員会
- 塩谷勝利・力武卓治1997『小葎遺跡』福岡市教育委員会
- 鈴木とよ江2007「土器に窓を穿つこと 愛知県三河地方にみる円窓付土器の導入と展開、そして変質化」『地域の多様性と考古学』青柳洋治先生退職記念論文集、雄山閣
- 鈴木敏則2021年「遠江の弥生土器棺墓－湖西市横枕遺跡から－」『向坂鋼二先生米寿記念論集』
- 酒巻忠史2003「18 打越遺跡」『千葉県歴史弥生時代・古墳時代編』千葉県
- 柴田常恵1930『世界美術全集』第四巻
- 塩谷勝利・力武卓治1997『小葎遺跡』福岡市教育委員会
- 高橋信明1995「円窓付土器考－その1－」『考古学フォーラム6』
- 武末純一2023「固城東外洞遺跡出土倭系土器」『三江文化財研究院遺跡発掘調査報告書固城邑固城東外洞遺跡』本資料は武末氏よりお送り頂きました
- 田中琢1983「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ（1）』
- 寺島孝一1979「平安京左京四条三坊十三町長刀鉾町遺跡」（財古代学協会）
- 武末純一2023「固城 東外洞遺跡出土倭系土器」『固城 東外洞遺跡』
- 田代弘1985「木津川河床遺跡出土の円窓付土器」『京都府埋蔵文化財情報』（財京都府埋蔵文化財調査研究センター）
- 土器研究B班1996「君津地方における弥生後期～古墳前期の土器編年」『君津郡市文化財センター 研究紀要Ⅶ』君津郡市文化財センター
- 永井宏幸2009「円窓付土器」『朝日遺跡8』総集編
- 永井宏幸他2000『朝日遺跡Ⅵ（新資料館地点の調査）』愛知県教育委員会
- 永井宏幸2013「円窓付土器からみた地域間交流」『柳田康雄古希記念論集』雄山閣：pp.117-139
- 永井宏幸2014「近畿出土の円窓付土器を考える」『研究紀要』第15号 愛知県埋蔵文化財センター：pp.75-82
- 中川和哉2003「池上遺跡第12次」『京都府遺跡調査概報第108冊』
- 村上吉正1996「神崎遺跡の再検討と関東の山中系土器」『神奈川考古第32号』神奈川考古同人会
- 屋谷洋1996『今宿五郎江遺跡Ⅲ・徳永A遺跡Ⅲ・丸隅山遺跡群Ⅰ』福岡市教育委員会
- 吉田富夫1937年「所謂圓窓附土器及び其の新例に就いて」『考古学』第九巻 第8号pp.401-403